

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

完成！中信高校山岳部年報/2010 No.34

僕が高校生だったころより発行し続けて34年。中信地区の高校山岳部の一年間の活動をまとめた「中信高校山岳部年報」の2010年版を今年も発行することができた。今年には北から、白馬、大町北、大町、池田工業、明科、松本深志、松本美須ヶヶ丘、松本県ヶヶ丘、塩尻志学館、木曾青峰（全日）、木曾青峰（定時）の（10校11課程）から原稿が集まった。これらの学校の顧問、生徒数を合計すると103名。この数は、往時に比較すれば少なくともはなっているが、それでも100名を越えている。クラブ数、部員数ともにこれだけの数が維持できているのは、日本の屋根のお膝元に位置するという好条件にある中信地区の学校の意地ともいえようか？さて、その年報の編集に携わって今年で8年目。以下に今年の編集後記を載せて、紹介をしたい。

編集後記：11年置いてもらった木曾高校が統合で消滅すると同時に、この春池田工業高校へ転任した。ありがたいことに山岳部の顧問を担当させていただくことになり、4月から月に一度の山行を合い言葉に、クライミングを取り入れての活動を続けてきた。

11月には、校内の理解を得ることができて、格技室内に横5.4m、縦4mのボルダ一壁を設置することができ、山岳部の活動拠点ができた。放課後になると、部員ばかりでなく興味をもった生徒たちが、集まってくる。山岳部の活動で重要なことは、いくつかの切り口を生徒に用意してやることと、活動が継続的に行われるような日常活動やそれが保障される環境をつくっていくことだと思う。その意味で、この一年間は苦労もあったが、楽しい一年であった。まだ部員は3人（2年1人、1年2人）だが、山の魅力を知った生徒が少しでもこの地道な活動に興味を持って入ってきてくれればと切に願う。

さて、34号を迎える本号にも、10校11過程の高校が原稿を寄せてくれた。それぞれに個性のある原稿が集まり、編集を担当するものとして嬉しい限りである。また、塩尻志学館高校の大西英樹先生の遭難一步手前の報告は、貴重な経験譚である。何もなくて当たり前、しかし事故はいつでも実は身近なところに潜んでいる。肝に銘じたいと思う。

来年は長野県山岳協会が創立50周年を迎える。テーマは「信州の山に登り、学び続ける」というものである。私たちが登り、学び続けてきた信州の山のよさを愛する高校生を今後も育てていきたいものである。

年報をご希望の方にはお頒けします。大西あてご一報ください。

ビーコンの特性・・・センター講師研修会から その1

1月22、23の両日、長野県山岳総合センターの講師研修会（長山協指導・遭対共催）が今年もまた行なわれた。今年の参加者は55名とこれまでの最高の人数となった。この数の分析はいずれセンターでもされるであろうが、長山協関係者という観点で考えたとき、長山協の加盟団体の参加者が31名と例年になく多く、その顔ぶれもこれまで

にいた人ばかりでなく、新しいメンバーも多かったのは何か明るい光明のように感じた。ちなみに、高校関係の参加者は、松田、久根、大西の3名であった。

この研修会は、昨年から国立登山研修所の専門職東秀訓さんが講師となっているが、「東色」をだしつつも、以前からと同様、レクチャーにおいても、実践においてもただの押しつけではなく参加者一人一人が考える研修会となっている。その点で、僕にとっては、毎年新しい知識や技術を更新しつつ、すでにわかっていることについても再確認でき、同時に他の山岳会や団体の方法などを知ることもできる重要な場となっている。今年の研修会は初日午前中、今までとは趣をかえてセンター所内で、「雪崩の科学的理解」「雪崩に遭遇しない登山の準備」「安全な雪山登山を実践するための事前の訓練」「ビーコンの基礎知識」についてレクチャーがあった。

午後は旧大町スキー場に移動してフィールドにおいて、3時間ほど、いくつかの実験や雪崩捜索に関わるシミュレーションを行った。最初にビーコンの機能についての実験を行ったが、ビーコンについては、各自が自分のビーコンの捜索時の反応距離を巻き尺を使い、実測で確かめた。機種はもちろんのこと同じ機種であっても若干の個体差があることが実際に確認できた。カタログにある捜索有効範囲と自分のビーコンの間での差異を知っておくことは意味のあることである。私の班においては、最大39m、最小で30m、多くは30から32mほどで反応した。帰宅後改めて各社のビーコンのカタログ記載値を調べてみたところ、大方は60m以下であったが、70mと謳っている機種が2つあったことをここでは指摘しておきたい。

続いて行った実験は、捜索時にビーコンが発信電波をどのように拾うかを調べるものであった。地上3mに設置したビーコン（3m埋没したと想定）の電波をどのように拾うかを確かめた。現実問題として深く埋没している場合、埋没ビーコンの真上ではなく、卵型波形になる電波の特性により、やはずれた2カ所にビーコンヒット箇所が現れることは理論上すぐにわかることだが、このことを実際に確認したというわけだ。つまり深く埋没している場合は、ピンポイントに固執せず、2カ所のヒット箇所から渦巻き状にプロービングするのが効率的だと言うことだ。現実の対応としてそれができるかどうかはこれまた難しい問題だが、そのことが体験的にわかったのはありがたいことだった。これらの実験を通して、これまで何気なくお守りとして持っていたビーコンについて再認識するきっかけとなった。

その後、掘り出しの体験と捜索のシミュレーションを行った後、再度センターに戻り班別協議、全体協議をじっくり行う中で、雪崩捜索に関する様々な意見を聞きあい深めることができた。

編集子のひとごと

◇日山協の50周年祝賀会があって、1月に東京にでかけた。出席者400名余。全国高体連で顔見知りの方、懐かしい方にも何人かお会いすることができ、旧交を温める機会となった。◇勤務先の池田工業高校のHP内に、「山岳部」のページを開設した。URLは、<http://www.nagano-c.ed.jp/ikekou/club/alpine/index.html>である。お暇な方、興味のある方は覗いてみてください。今年一年間の活動の報告を、写真と生徒の文章で綴っている。折しも今日から長野県では前期選抜の願書受付がはじまった。これを見て、一人でも興味をもった生徒が入ってきてくれれば嬉しいなあなどと皮算用。（大西 記）